

海の光

夏草の繁殖力はすさまじく、ちよつと怠けると庭は草だらけになってしまふ。人間には夏バテという現象があるが、庭の雑草にはそんなものはないらしい。わが家を訪れる人々の多くが伸びた草を眺めては、刈り取ってくれた。庭の草を取りながら思うことは、農業は不自然な姿勢で長時間、労働にしたがわねばならないという過酷なものがあるが、わが家の庭ぐらゐの広さでは問題にならない。むしろバランスのとれたよい運動になる。だが若いころにはひと晩の熟睡で完全に抜けた疲労も、今はそうはいかない。

時の流れの早さには逆らう術もない。年の瀬が迫ると、七十歳にはなりたくないと思いつつ、この数年間を過ごしてきた。しかしこればかりはどうにもならず、寂しい思いをしている。

老化は人によってそのテンポはちがっても確実にやってくる。考えねばならないことは「オレだけは別だ」と思つてはならないことであろう。からだの老化は、いやでも知らされるが、自分でボケたということとはわからないからやっかいだ。老人には孤独がつきまとう。孤独に強い人はいいが、孤独に弱い人はみじめである。とくに若いときにちやほやされた人ほど、老人になつて孤独に耐えられなくなるようである。年をとると、人間のからだや脳が老化し、社会の中での存在がだんだんうすくなる。歳をかさねるにしたがつて、ひとはみずからの周囲にいる人間とばかり交友をむすびがちになる。年をとれば親友の数は必ず減り、そうでなければ自分が死ぬかのどちらかである。

庭いじりを楽しみ、孫に小遣いをやり、たまには温泉や海外にでも行けるような老後を持ちたいと思う人は多い。はたしてどれだけの人にその余裕があるだろうか。

この年、幾人かの知人や友人がこの世を去つていった。平戸にすむ彼は、多くの人々の前で尺八の演奏中かがみこんだきり、一度と起きあがらなかつた。抱き起こしたときにはもう呼吸がとまっていたという。「おい生とるやあ」で始まる彼の電話の声は、もう聞くことはできない。葬儀に参列しながら彼は本当に死んだかどうか私は怪しんだ。

「生きとるぞー」とか何とか叫んで彼が突如お棺の蓋を開けて起きあがつて来るような気がしてならなかつた。若い頃からそうした類の悪ふざけが好きで、私などは時折やられたものだ。いつまで待っても動

かない彼に私はだんだん熱いものがこみあげてきて、最後まで葬儀に参列する気力が無くなった。私は空をふり仰ぎ太陽に顔を晒して、涙の跡をごまかそうとした。

「おーい生きとるやあ、出て来いよ、旨い馬刺しがあるぞ、福島でポーツとして暮しとると、奥さんから廃品回収に出されるぞう」

「おれは静かに暮らすとがよか」と言うと、彼はすかさずこう言った「死ねば静かになるさ」と。これが最後の電話のやりとりとなった。約束の時間に、遅れてばかりいた彼が、どうして人より早く死んだのだろう。暮れが迫るにつれて、私は改めて彼がいけない寂しさが身に沁み、空白の大きさを知らされた。

この先、私を確実に待っている死が、彼のそれよりまじだという保証は何もない。苦しみ抜いて、身近な人に迷惑をかけ、ようやく息を引きとるのかもしれない。静かな人生どころではないかもしれない。

この春、胆石の手術で妻が福岡の病院に入院した。知人の医者や子供の嫁たちが、涙ぐましいまでの協力態勢をとってくれた。主治医の話は簡潔で、やさしさにあふれていた。患者を見る目が暖かく、さわやかな手術の説明であった。孫たちは落ち着かないで不安な様子を見せ、口には出さぬが、まわりの者たちが祈るような気になっているのに、本人はあつけらんとして、全く動じた気配を見せなかった。手術の前の夜半に、病室のベッドから落ちて同室の人たちを、笑わせたいらしい。退院の日「お父さん、よかったですね」と嫁が涙まじりに言った。私は声がつまり、黙ってうなずいた。心の中で波立っていたものが、すべて消え去ってしまったような退院の帰り、私はぽつんと言った。「人生って、本当にいろんなことがあるね」。妻はふだんと変わらない様子で答えた。「ほんと、お世話をかけました」。

東海道新幹線ひかり号は、東京と博多の間、距離にして一一八キロを六時間足らずで走る。昔の長旅の面影はなく、桁ちがいになくなった。良くも悪くも世の中は大きく変わっていく。妻が東京の中野のホテルでの研修会に出席するというので、荷物持ちを志願、お供することになった。妻が生まれ育った東京という土地に対する強い関心がある。翌朝、中野のホテルに妻を送りとどけ、私は上野の国立科学博物館での「桜蘭王国と悠久の美女展」を見学した。館内は大勢のシルクロードファンでにぎわっていた。混雑を予想してか、老人の姿はあまり見かけない。古代の生活に想いを馳せる、熱心な若者たちの姿が印象的であった。

約三千八百年の時を経て、発掘された桜蘭王国の美女のミイラは、顔の筋肉が生前そのままについており、右の目はくぼんでいるが、左の目は静かに閉じており、口は真一文字に閉じていた。下肢を伸ばし仰臥の姿勢で膝から下は毛織物が破れたのか、むき出しになっている。鳥の羽のついたフェルトの帽子をかぶせられ、羊の皮の靴をはかされていて、手厚く葬られていたのがわかる。幸せな女性だったと想像される。

古代の文明、風俗、習慣を研究するためには、考古学の立場から遺跡発掘をしなくてはならないことはいうまでもない。しかし彼女は今になって思いもかけず永遠の眠りからゆり起こされ掘り出されて、はるばる遠い日本に連れて来られようとは、思いもよらなかったことであろう。もしも彼女に心があるとすれば、どんな思いで多くの人たちを観察しているだろうか。

新宿の高層ビルや、銀座街には私はあまり魅力を感じない。古い江戸の面影がいろいろと残っている浅

草や上野が好きであり、秋葉原や築地の魚市場に興味がある。そんな私の意志は口には出さなくても、妻の弟妹たちはわかっていて、ずっとつきつきりで案内してくれた。彼らの好意を強く感じた、心に残るいい旅であった。

命というものはかけがえのないものだということは、誰だって知っている。あばら骨が飛び出し、体にかかるハエを追い払う気力もなく、ただ死を待つ人々、ソマリアの映像には心が痛む。半世紀前、ガダルカナルやボルネオのジャングルでも、多くの日本兵があのような姿で死んだのである。

中国残留孤児の訪日調査をテレビが報道している。生きるか死ぬかの極限状態でせめて子供だけでもと祈って、中国人にわが子を預けた親を誰が責められよう。人生には様々な巡り合わせがあるものだ。いつものことながら、離日する成田での残留孤児たちの後ろ姿には、胸の痛くなる思いをさせられる。

随筆家としていい仕事を次々とされてきたM氏が「面白かったこの世」という本を出版した後、忽然とこの世を去った。M氏と一緒に壱岐に旅したことがある。静かな宿の夜、次のような話を私にされた。

自分の葬式に当って、楽しみにしていることが一つある。最後のお別れに来て下さった人たちに対して、お別れの言葉をテープに吹き込んでいるのだが、それをお聞きになった皆さんが、どのようにお受け取りになり、どのような反響をお示しになるだろうかと楽しみにしている。長い間お世話になってきた人たちへの、最後のお礼やお別れの言葉は、自分自身で心の底から申し上げたい。その日聴く人の心にうったえたいという思いが強く働くので、とてもいい加減なことはいえない。涙を拭きながら書き、あのひと、このひとのことを走馬灯のように思い浮かべながら懸命に吹き込んだと。

M氏のお別れの言葉は、葬儀に参列した人々に深い感動を与えたことはいまでもない。

私は昭和十七年から足かけ四年軍隊にいた。私の人生の最悪の四年間で、もし今一度生れ変わるチャンスを与えられるとしても、この期間の再現だけは免除して欲しいと思っている。唯一よかったことは、軍隊の最低辺の体験をし、人間が極限状態でどのように生きるかを知る機会を得たことである。批判力も定かでないままに、南方の戦場に駆り出されたが、自分とは全く違った生活意識の人たちを多く知ったことである。

人は人生の行路をどれだけ自分の意志で選ぶことができるのだろうか。意外と選択の幅は小さいのではないか。まず、親を選ぶことができない。人生の第一歩である出生から偶然である。

私は今になって、若い日のいわば単純な、それだけ純粋な考えを取り戻せるとは思わないが、残りの人生へ向かって進む気力は衰えさせたくないと願っている。世の中から無用の烙印を捺される前に、自分なりにやっておきたいことも多少ある。私はどちらかといえば運は悪くはない方だと思っている。戦争でも死ななかつたし、戦後もなんとか生き延びた。これからの残り少ない余生を大切に生きたいと思っている。戦争は遠く過ぎたが、わたしたちはなお戦争の記憶を負い、戦後と呼ぶ日々の貧しさを重く曳いて生きて来た。夜中にふと目をさまし、かつての戦場のことを思い出すこともある。三十三回忌をさかいにして、死者は遠くへ去るといわれるが、現実にはむしろ逆であるように思われる。私には、かえって身近に感じられてならない。若くして死ぬことの痛ましさを、胸底深いところで受けとめるようになった私自身の年齢のせいもある。私は両親や妻の父の生前に、もつと丁寧とその昔話を聞いておかなかったことに、強い後

悔がある。このところ、何かにつけて昔を思い起こすことが多くなったその感傷癖のせいだろうか。

生きている限り、死者を思いつづけていく人もある。終戦近くわが子を特攻隊で亡くした老いたある母親は、夏の日の積乱雲を悲しみなしに、仰ぐことはできないと語った。突然やってくる悲しみを、人はみな乗り越えていかなければならない。

七月中旬の暑い土曜日、博多湾に浮かぶ能古島で戦友会があった。姪浜港からフェリーで約十分の短い距離である。船内は海水浴や釣を楽しむ人々が多かった。私は左舵の手すりに沿って櫓の方へ行った。耳元でしきりに風が鳴っている。手すりに頬杖をつき櫓の果てに泡立つ航跡を見るときも眺めていた。針をまき散らしたようにキラキラと光る海を見てみると、かつての南方の洋上での様々な悲惨な出来事が、鮮烈な色彩を帯びて私の脳裏に浮かんできた。不幸にして船内で死亡した戦友の髪と爪を切り、封筒に入れた後、遺体を粗末な唐米袋に入れ、海中に投げ入れ水葬した時の海の光と夕映えは、今もなお忘れることはない。

前回は十七人集まった戦友会も、今回は九人となった。戦争では生き残った仲間が次々とこの世を去っていく。

敗戦とともにそれぞれの故郷へ戻って四十七年。考えてみると、我々の人生の中であの当時ほど強烈な生き方はなかった。楽しい思い出とは全く縁のない、余りにも激しく過酷な生き方であった。

一年に一度しか訪れない貴重な一夜を、眠ったりしては悔が残ると語り明かした戦友たちも、別れが近づいた帰りのフェリーでは、だんだん無口になり光る海をじっと眺めていた。八十歳になる交響楽団の指

揮者のEが、「この秋にも海外演奏に出かけるが、海外での指揮は、今年が最後になるだろう」と、寂しく見える顔で言った。私は彼の帰国後に行なうであろう演奏会には、必ず出かけて行きたいと思っている。別れに当たって、いつもより握り合う手に力がこもっている。次回の会合には、誰かが欠けるといふ想いが暗黙のうちにあるのだ。

姪浜駅のホームで見送る私に、戦友たちは手を振った。私も大きく手を振った。この世でのさまざま活動も終わりに近づいた戦友たちを乗せて、電車は見る間に遠のいて行った。

